

# 金正恩時代の北朝鮮美術

畑山康幸

(東アジア現代文化研究センター)

## はじめに

本稿では、北朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国における美術の創作状況、とりわけ金正恩体制下の美術の機能について、政治とのかかわりを検討し、報告したい。

北朝鮮における美術の創作状況を知るには、新聞(『労働新聞』、『文学新聞』他)、雑誌(『朝鮮芸術』、『美術』)、『朝鮮文学芸術年鑑』、国家美術展覧会『画集』などを検討する必要がある。また歴史的には『朝鮮美術史(現代編)』やかつて刊行されていた専門誌『朝鮮美術』が参考となる。朝鮮中央テレビもしばしば展覧会の様子を伝えるなど美術関連の番組を放映することがある。

韓国では北朝鮮美術について数多くの研究論文や研究書が発表されている。最近の一例としては国立文化財研究所美術文化財研究室の『北朝鮮美術きのうときょう』(大田・国立文化財研究所 2016)がある。欧米ではJane Portalらによる北朝鮮美術についての調査報告もある(《Art Under Control in North Korea》Reaktion Books, London 2005)。2010年にはウイーンで大規模な北朝鮮美術展《Flowers for Kim Il Sung》が開かれ画集と研究報告書(《Exploring North Korean Arts》Verlag für moderne Kunst, Vienna 2012)が出た。日本での研究は断片的なもののみで、まとまったものとしては大場和幸『北朝鮮宣伝画の世界』(レインボー出版 2012)や報告者の『ユートピアを表象する版画家たち～北朝鮮現代版画事情～』(レインボー出版 2016)程度にとどまっている。

北朝鮮美術を究明するには、美術作品と政治の関係、とりわけ指導者の政治理念とのかかわりが中心的な課題となる。今日の北朝鮮美術は金正恩

の指導思想である「金日成－金正日主義」を反映したものである。北朝鮮では美術が政治化されており、美術は政治に従属する存在である。美術状況を考察することは政治体制を検討することでもある。

## 1. 金日成時代の北朝鮮美術

1945年、朝鮮半島北部における美術創作活動は「反帝反封建民主主義革命と社会主義」をめざす手段として、そのスタートを切った。朝鮮労働党が結成され、土地改革などの社会変革とあわせて、民族文化の建設がうたわれ、美術も「革命偉業遂行において力ある思想的武器のひとつ」と位置づけられ、初期の段階から美術の政治化がなされた。また文学や美術には「社会主義的リアリズム」の創作方法が導入され、抽象画は否定された。1946年3月には北朝鮮文学芸術総連盟(10月に「総同盟」に改編)が結成され、北朝鮮美術同盟も創立された。1947年には平壤に美術学校が設立され、1949年に美術大学となった。

金日成の「普天堡戦闘」を描いた鄭寛澈作《普天堡の烽火》がこの時期の代表的な作品とされている。

現在の北朝鮮では現代美術のルーツを「抗日美術」に求めている。しかし、当時、活動した美術家の多くは日本でモダニズム美術を学んだ人々であった。いわば日本の美術専門学校は北朝鮮美術の揺籃でもある。

朝鮮戦争時期には戦争勝利のためにすべてが動員され文学芸術も例外ではなかった。美術作品には「勝利へと鼓舞」する力が求められ、美術は戦争を遂行する武器ともなった。この時期には、北朝鮮から韓国へ、さらに韓国から北朝鮮へと美術

家の移動がみられた。1951年3月には朝鮮美術家同盟が結成された。戦時美術展覧会が組織され、1953年にはハンガリーでも北朝鮮美術の展覧会が開かれた。

1953年から1960年までは「戦後人民経済復旧発展および社会主義基礎建設時期」とされ、これにそった作品の創作が中心的課題となった。1955年12月、金日成は《思想事業において教条主義と形式主義を退治し主体を確立することについて》を発表した。美術界においても「反動的ブルジョア文芸思想」が批判され、「主体の確立」、「党性、労働階級性、人民性」の強化が求められた。1956年4月の朝鮮労働党第3次大会は「主体的、革命的美術創作発展の転換の契機」となった。1956年の12月全員会議では「千里馬運動」が呼びかけられ、文学芸術分野では模範的人物を描く「千里馬騎手の典型創造」が重要な課題となった。

1961年以降は「社会主義全面的建設時期」とされ、金日成は美術作品に「抗日武装闘争……わが人民の闘争の姿、躍動する現実」を描くことを求めた。1966年10月16日には、第9次国家美術展覧会を現地指導した際の談話《われわれの美術を民族的形式に社会主義的内容を盛った革命的な美術に発展させよう》で、北朝鮮美術は「朝鮮画を土台」にすべきで、「西洋画のみは民族虚無主義、事大主義」に陥ると批判した。美術には「共産主義教育」の役割が求められ、作品主題は「革命伝統主題作品、祖国解放戦争の偉勲、南朝鮮人民の革命闘争、社会主義制度での幸せ」を描くように指示された。(以上の記述はキム・ジェホン他『朝鮮美術史(現代編)』平壤・2.16芸術教育出版社2000等に依拠した。)

## 2. 金正日の登場と北朝鮮美術

金正日は1960年代から党中央で活動し始めたが、その動静は対外的にすべてが秘密にされ、1980年まで公にはされなかった。金正日は1967年5月の党中央委員会第4期第15次全員会議後に演説《文学芸術部門において党の唯一思想体系をしっかりと打ち立てることについて》を行い、「唯一思想体系」構築の必要性、反党、反革命宗

派分子の思想余毒を取り除くことを訴えた。「抗日革命」闘争期の文学芸術の伝統を継承発展させ、党中央の唯一的領導を保証するための事業体系と革命的規律の構築を掲げるなど、金日成思想に依拠した「チュチェの文学芸術」の大全盛期を構想した。美術は社会主義、共産主義の建設をめざすマルクス＝レーニン主義にもとづいた「社会主義的リアリズム」から、金日成思想の絶対化をはかる「チュチェ美術」へと変貌した。各地に記念碑美術が建立される一方、北朝鮮型の「文化大革命」も進行し、指導者の意に沿わない作品が否定されたりもした。

『朝鮮美術史(現代編)』は1970年から80年代にかけてを金正日の活動に焦点をあてている。後継者に秘密決定された金正日は1974年2月19日に「全社会の金日成主義化」方針を打ち出し、美術は「全社会の金日成主義化」をめざす手段となった。万寿台の丘には金日成銅像が建立されたほか旺戴山、三池淵にも大記念碑が作られ、平壤地下鉄の大壁画制作、映画舞台芸術などにも力が注がれた。風景画の政治性を高めるために「革命戦績地」を主題とした作品が数多く登場した。『朝鮮美術史(現代編)』は、1970年代が「首領様のチュチェの文芸思想と敬愛する将軍様の文芸理論」の大全盛期となったと指摘している。

朝鮮労働党第6次大会での金日成報告によって、1980年代以降は「全社会のチュチェ思想化」(「全社会の金日成主義化」)が「革命の総的任務に宣布」され、美術にも「全社会の金日成主義化」を実現する使命がさらに強化された。金正日は1981年3月31日、全国文学芸術人熱誠者大会を組織するなどして、北朝鮮における美術創作の主題方向を提示した。金正日は「首領様と党の偉大性」に対する主題、「革命伝統」に関する主題、「祖国」に関する主題、「社会主義現実」主題、「階級教養」主題、「祖国統一」主題、「軍民関係」主題を提示している(『朝鮮美術史(現代編)』)。1991年2月11日、金日成は《人民的な美術作品をさらに多く創作することについて》で、万寿台創作社の活動成果を評価し、同時にそれが金正日の指導の結果であると述べた。

金正日は1991年10月16日、《美術論》を発表

し、その中で「チュチェ美術創作で堅持すべき根本原則と形象的な要求」を示すとともに、「基本原理、社会主義美学の歴史的使命、本質的特性、創作方法」を明らかにした。北朝鮮美術は「首領形象画」の創作や「金日成主義者の形象」が最大の課題となった。

北朝鮮美術界では金日成談話《われわれの美術を民族的形式に社会主義的内容を盛った革命的な美術に発展させよう》や金正日『美術論』が絶対的な指針となった。「金日成主義」を指導思想とし、「全社会の金日成主義化」が「最高綱領」となったことで、北朝鮮は「金日成主義」を“教義”とする宗教性を帯びた国家に変質し、美術は「全社会の金日成主義化」の一翼をになうことになった。

### 3. 金正恩時代の北朝鮮美術

#### (1) 北朝鮮美術の「偉大な領導者」金正恩

金正恩は2012年4月6日、朝鮮労働党中央委員会責任者たちと行った談話《偉大な金正日同志をわが党の永遠の総秘書として高くいただき、チュチェ革命偉業を輝かしく完成しよう》(『労働新聞』2012年4月19日付全文掲載)で、「朝鮮労働党の指導思想は偉大な金日成-金正日主義である」、「全社会の金日成-金正日主義化はわが党の最高綱領である」と語った。また金正恩は「朝鮮労働党を永遠に栄えある金日成、金正日同志の党に限りなく強化発展させてゆく」決意を披瀝した。さらに金正恩は「チュチェ革命偉業を輝かしく完成しよう」と呼びかけ、「チュチェ革命偉業」の継承とその発展が自身の任務であることを明らかにした。

金正恩の「4月6日談話」は「古典的労作」と位置づけられ、「偉大な金日成同志と共に偉大な金正日同志をわが党と人民の永遠の首領に高く奉じ……首領様と將軍様の構想と偉業を輝しく実現してゆこうえで特記すべき意義をもつ歴史的文献」であると評されている(院士・教授・博士キム・ファジョン、教授・博士チェ・スノク、博士キム・ソンイル、チャ・ソニル執筆『敬愛する金正恩同志の古典的労作《偉大な金正日同志をわが党の永遠の総書記に高く奉じチュチェ革命偉業を

輝かしく完成してゆこう》に対する解説論文集』平壤・社会科学出版社 2014)。談話は「チュチェ革命偉業を代を継いで輝かしく継承、完成してゆくことができる最も正しい指針」(同)であるとされている。

金正恩はこの「4月6日談話」によって、党、政(国家)、軍の最高指導者にふさわしい人物と認定され、「チュチェ革命偉業」、「先軍革命偉業」の継承者として、4月11日に開かれた朝鮮労働党第4次代表者会において、第一書記(当時)、党中央委員会政治局員、政治局常務委員、党中央軍事委員会委員長に推戴された。同時に朝鮮労働党規約が改正され、金正日は「永遠の党総書記」と明記され、金正恩は「偉大な金日成同志と金正日同志の革命偉業を勝利へと導く朝鮮労働党と朝鮮人民の偉大な領導者」と規定された。

こうしたプロセスを経て、金日成の「10月16日教示」や金正日の『美術論』が継承されるとともに、金正恩は美術界における「偉大な領導者」となった。

2016年5月に開かれた朝鮮労働党第7次大会で金正恩は「舞台芸術部門と美術部門では党の文芸思想と理論、美学観が具現され、わが人民の美感に合い、人民が好む名作を創作創造しなければならない」(『朝鮮労働党第7次大会において行った中央委員会事業総和報告』平壤・朝鮮労働党出版社 2016)と語った。

またハ・ギョンホ教授は、金正恩が「わが美術を先軍革命領導の威力ある武器に、わが美術家たちを時代を先導し推動する革命の旗手に立たせてくれた」(教授、博士ハ・ギョンホ「敬愛する金正恩同志は偉大な首領様たちの太陽像を人類美術の万年財宝に燦然と輝かした造形芸術の巨匠であり偉大な師であられる」『敬愛する金正恩同志は先軍文学芸術の卓越した英才』平壤・社会科学出版社 2015)として、美術が金正恩が導く「先軍革命領導の威力ある武器」であることを強調している。

金正日は『美術論』で「チュチェ美術の歴史的使命は人民大衆の崇高な美的理想を真実に反映することで人民大衆を党と首領の周りに団結させ社会主義、共産主義のための闘争へと力強く呼び起

こすところにある」と述べたことがあるが、金正恩時代においても美術は北朝鮮独自の「社会主義、共産主義のための闘争へと力強く呼び起こす」使命が付与され続けている。

## (2) 金正恩の美術分野における“業績”

### (ア) 万寿台創作社への金正日現地指導に同行

『労働新聞』（2011年1月23日付）は「偉大な指導者金正日同志が万寿台創作社を現地指導された」と伝えた。これには朝鮮労働党中央軍事委員会副委員長であった金正恩、党政治局委員で党秘書の金基南、党政治局委員で党中央委員会部長であった金慶喜らが同行した。

記事には、金正日が「創作社の構内に新たに戴いた偉大な首領様の銅像を見られたあと功勳彫刻創作団をはじめとする何か所かを長い時間をかけて見て回り美術創作事業状況を具体的に了解なさった」とある。また金正日の発言として「美術作品は党員と勤労者の政治思想教化と情緒教育で重要な意義をもつ」と伝え、「美術は人々を革命と建設へと力強く推动する威力ある手段の一つである」とも述べた。紙面には創作社の美術家らと写した記念写真も掲載され、そこに金正恩も写っている。しかし、この記事では金正恩の具体的な発言は伝えられていない。

金正日は現地指導を終えたあと、金正恩や万寿台創作社従業員とともに創作社芸術小組〔サークル〕の公演を観覧した。公演では、女性重唱《前線千里野戦車駆ける》、女声2重唱《降仙の夕焼け》などのほか、詩と合唱《代を継いで忠誠を誓います》が歌われた。これは万寿台創作社の美術家らが金正恩を前にして「代を継いで忠誠を誓った」とものと解釈される。金正恩が金正日の万寿台創作社への現地指導に同行したことは、金正恩が美術部門における後継者であることを示唆するものであった。

### (イ) 金正恩による「太陽像創造事業」と「首領形象事業」の推進

#### ●金正恩による「首領永世偉業」の継承完遂

2011年12月17日、金正日総書記が死去したあと、金正恩にとって最も重要な課題は「首領が開拓した偉業を輝かしく継承完遂ことであり、そ

こで提起される先行する問題は首領の永世偉業を実現することであった」（「金正恩第1委員長は先代首領に対する忠実性の最高亀鑑であらせられる」『祖国』チュチュエ101〔2012〕7月号東京・朝鮮新報社）とされている。「首領が開拓した偉業」とは「チュチュエ革命偉業」、「先軍革命偉業」のことであり、北朝鮮に絶対的政治体制を構築したことを指している。また「首領の永世偉業」とは「首領」の「革命業績を永く輝かせる」（『金正恩将軍と時代語1』平壤・百科事典出版社2017）ことである。

このため金正恩は「錦繡山記念宮殿を錦繡山太陽宮殿と命名し主席様と将軍様を永世の姿で奉ずるようにし、『金正日全集』の出版と朝鮮革命博物館と労作展示館を新たに整え、記録映画、出版物を編集し、全国に太陽像を奉じ永世塔と主席様と将軍様の銅像を建立」（「金正恩第1委員長は先代首領に対する忠実性の最高亀鑑であらせられる」）し、「光明星節を制定し金正日将軍に大元帥称号を授与し……永遠の総書記、永遠の国防委員会委員長に高く推戴した」（同）。

金正恩は、「チュチュエ革命偉業」、「先軍革命偉業」の継承と完遂のため、先行する課題とされた「首領永生偉業」のため、全国に「太陽像を奉じ永世塔と主席様と将軍様の銅像を建立」（同）したのであった。

#### ●金正恩による「太陽像創造事業」

金正日の死去後、金正恩は「首領様たちに対する絶対的な忠実性ともっとも純潔な革命的義理を体して太陽像創造事業に心血をそそいだ」（ハ・ギョンホ「敬愛する金正恩同志は偉大な首領様たちの太陽像を人類美術の万年財宝に燦然と輝かした造形芸術の巨匠であり偉大な師であられる」）ことが強調されている。それは「首領に対する忠実性は革命的義理の最高表現だ」（『金正日遺集・増補版』第18巻）という金正日の遺訓でもある。さらにそれは「金正日が……なしとげた太陽像創造とその理論を……輝かせる」（ハ・ギョンホ論文）ことでもある。

そもそも「太陽像創造事業」は金正日によって初めて行われた。金正日は金日成が死去した時《偉大な首領金日成同志は永遠にわれわれととも

におられる」というスローガンを提示し、錦繡山記念宮殿を「チュチュの聖地」とする一方、《万民の太陽金日成同志》太陽像を奉ずるようにし、「首領永世美術」を完成させた（同）。

ハ・ギョンホ論文において金正恩は、金正日がつくりあげた「太陽像創造理論を豊かに発展させ」、金正日の「太陽像」を「わが革命の万年財宝、人類美術の最高の名作に輝かした非凡な思想理論家であられ、首領永世偉業継承の最高化身である」（同）と強調されている。またハ・ギョンホは、《先軍太陽金正日同志》が完成したのは、金正恩の「首領永生偉業に対する忠実性」、「高潔な道徳義理心」、「太陽像創造偉業の継承」によるものであると記している。ハ・ギョンホは、金正恩が美術史上初めて太陽像の本質を明らかにしたとも述べ、「偉大な首領様たちはあの空の太陽と同じ方」であると語ったことを明らかにしている（同）。

こうしたことに加えて、金正日の「太陽像」は生存時に創作して奉ずる問題が金正恩によってすでに発起されており、2009年9月に軍人美術家に金日成生誕100周年にあわせて「太陽像」を形象するようにとの課業を与えていたという（同）。

北朝鮮では金正恩の名のもとで、金正日の「太陽像創造事業」を遂行し、金日成と金正日の「首領永生偉業」を完遂しようとした。「太陽像」という美術作品（絵画）を制作する過程で、金正恩が「革命的義理」の所有者であり、「非凡な思想理論家」であるとのイメージがつくりあげられ、権力のスムーズな移行とその基盤の構築に活用された。

#### ●金正恩による「首領形象事業」の展開

北朝鮮では金正恩のさらなる“業績”として「記念碑彫刻像、絵画像、モザイク壁画、石膏像、銅貨像、メダル像、肖像徽章〔バッジ〕を太陽像で形象」したことがあげられている（ハ・ギョンホ論文）。

『労働新聞』（2012年2月15日付）は前日の14日に「偉大な首領金日成同志と偉大な領導者金正日同志の銅像が万寿台創作社に建立」されたと伝えた。万寿台創作社に建立された銅像は金日成と金正日の騎馬像であった。記事は、騎馬銅像が

「父なる首領様と偉大な將軍様を永遠に高く奉じてゆくわが軍隊と人民の絶対不変の崇高な道徳義理心に支えられてそびえたった首領永生、首領賞賛の記念碑」であり、また銅像は「先軍朝鮮の勝利の象徴、混然一体の決定体」であり、「父なる首領様と偉大な將軍様の巨大な革命生涯の業績を後孫万代に永く輝かせる」ことになったと報道している。

朝鮮労働党中央委員会政治局常務委員会委員で最高人民会議常任委員長である金永南が除幕の辞を述べた。このなかで金永南は、金日成が「社会主義朝鮮の始祖であり人民の慈愛深い父」であり、金正日については「父なる首領の思想と偉業は偉大な金正日同志の領導によって輝かしく継承発展」されたと述べた。また金永南は「金正日同志の銅像を高くいただきたいという千万軍民の切々たる念願は敬愛する金正恩同志の限りなく高潔な忠情と細心の指導によって輝かしく実現できた」とも強調した。さらに金永南は「すべての黨員と勤労者たちは敬愛する金正恩同志を政治思想的に、命で決死擁護しその方の先軍革命領導を忠実に奉じ」るべきであると訴えた。

金日成と金正日の銅像を万寿台創作社構内に建立することは、「革命生涯の業績を輝かせる」だけではなく、すべての黨員と勤労者に金正恩を「決死擁護し……先軍革命領導を忠実に奉じ」るようにするねらいがあった。

また『労働新聞』（4月14日付）は、13日に「偉大な金日成同志と金正日同志の銅像万寿台の丘に建立」と伝えた。これは4月15日が金日成生誕100周年にあたってのことと関連している。新聞は「偉大な金日成同志と金正日同志を党と国家の最高首位に永遠にいただき千年万年従い太陽の偉業を代を引き継ぎ最後まで完遂してゆく絶対不変の信念を抱いて」金日成と金正日の銅像を建てたと伝えている。

金永南は除幕の辞（『労働新聞』4月14日付）で「金日成同志と金正日同志の銅像をともにいただき首領様と將軍様の偉大性を高く賞賛し万代に永く輝かすのは千万軍民の切々たる望みであった」と述べ、銅像の建立が金日成と金正日の「偉大性を賞賛し万代に永く輝かす」ところにあった

と明言した。さらに金永南は、金正恩について「首領永生偉業実現の新しい章を展開されておられる」と述べ、銅像の建立を「精力的に導いてこられた」ことも強調した。また、金正恩が銅像形成案を何度か見て「首領影像美術作品創作」における問題と形象方途を教えたとも指摘している。そして銅像を建立したことは「わが党と人民の最高領導者金正恩同志の崇高な道德義理と精力的な領導の高貴な結実であり」、「わが軍隊と人民の絶対不変の信念の一大誇示となる」とも述べている。金永南はこの除幕の辞で、「金正恩同志を首班とする党中央委員会のまわりに固く団結し社会主義強盛国家と祖国の自主的統一のために、チュチェ革命偉業の終局的完成のために力強く闘ってゆこう」と呼びかけ、「金日成－金正日主義万歳」の言葉で結んでいる。

朝鮮語雑誌『祖国』（2012年7月号）に掲載された「金正恩第1委員長は先代首領に対する忠実性の最高亀鑑であらせられる」は除幕式について、「第1委員長の首領に対する忠孝一心を明確に示している。……首領永生偉業の新しい章を開いた金正恩第1委員長は金正日將軍様を忠実に奉じてこられた忠実性の亀鑑であられる」と評している。

金日成と金正日の銅像の建立は単なる銅像の建立にとどまらず、金日成と金正日への「偉大性の賞賛」であり、金正恩の「首領永生偉業実現」の一環であり、金正恩を朝鮮半島の伝統的価値観である“忠”や“孝”の体現者（＝亀鑑）であることを強調したものである。

金日成・金正日像のうち、金正日像はコート姿からジャンパー姿に変更されたことが、2013年2月になって『労働新聞』に掲載された写真から判明した。金正恩が銅像形成案を何度か見て建立した（金永南の辞）にもかかわらず、なぜ変更されたのかその経緯は説明されていない。

北朝鮮ではその後も「首領形象事業」、「首領影像美術作品創作」が続き、各地に金日成・金正日の像、モザイク壁画などが作られた。

2013年7月には「祖国解放戦争勝利60周年」（朝鮮戦争休戦60周年）にちなんで、「祖国解放戦争勝利記念館」本館中央ホールに元帥服を着て閱兵式広場で歓呼に答える金日成のカラー彫刻像が制

作された。また文繡通りの水泳場にも海を背景にして腕を組む金正日のカラー彫刻像が作られた。

当初、「祖国解放戦争勝利記念館」中央ホールには軍帽をかぶり、元帥服を着た金日成の大理石立像が作られる予定であった。2012年6月に万寿台創作社で大理石立像が完成したという報告を受けた金正恩はそれを見て、「元来主席様は帽子はあまりかぶらなかつたので、帽子をかぶらない像で、彩色した像とするように」との課業を与えたという（キム・ミョンウン「チュチェ美術の新しい境地を開拓なされ」『祖国』チュチェ103〔2014〕2月号）。

キム・ミョンウンは「世界の彫刻史においてこれまでカラー彫刻という種類はなかつたし、……尊厳高い首領の彫刻像をカラーで形象するということはこれまで誰も考えてみたことはなかつた」と書いている。完成した主席のカラー彫刻像が、あまりにも「生前の偉大な主席様に対してのようで」強い衝撃を受けた、とキム・ミョンウンは記している（同）。

また文繡通りの水泳場には、当初金正日の彫刻像を奉ずる計画はなかつたが、前年の9月に現地指導した金正恩が建物の中央ホールにカラー彫刻像を奉ずることを発起したという（同）。カラー彫刻像創造は「大元帥様〔金正日〕を恋しく思う敬愛する元帥様〔金正恩〕の高潔な忠誠の情の現れであり、……大元帥様が千年万年の歳月が流れても永遠にともにいらっしゃるという確信をここに深く植え付けるようになった」と説明されている（同）。

#### ●金正恩が指導した「祖国解放戦争勝利記念館」影像作品創造

2013年5月、金正恩は「祖国解放戦争勝利記念館」に展示する金日成を形象した影像作品（油画）を創作していた万寿台創作社を訪問した。

金正恩は、《作戦を構想される偉大な首領金日成同志》、《新しい戦法を教える偉大な首領金日成同志》、《朝鮮人民軍指揮成員たちにタンク利用方針を提示される偉大な首領金日成同志》をはじめとする作品を見て、歴史主義の原則と時代状況をよく生かしたと称賛したとされる（ハ・ギョンホ論文）。

金正恩は、金日成を象徴した美術作品創作における基本は「わが軍隊と人民のこころのなかに秘められている首領様の姿をそのまま抱くことができるようにすることだ」と述べ、「この原則を首領形象主題の作品創作において鉄則としなければならない」と語った（同）。

このように金正恩は、金日成・金正日の「太陽像」を銅像、モザイク像、石膏像、肖像画徽章に描くことについての教えを与えたとされている。

ハ・ギョンホはまた、全国の家と事務室、病室に金日成・金正日の「太陽像をともに奉ずることは太陽民族の特典であり幸福である」し、「偉大な首領様と將軍様の生前の姿を永遠に戴いて暮らしたいという軍隊と人民の切々たる世紀的望みが実現した」とも述べている（同）。

ハ・ギョンホはさらに「首領永生偉業の輝かしい章を開き太陽像創造事業を輝かしく継承発展したのは金正恩の「高貴な業績」であるとし、この「業績」を「千万軍民が永遠に忘れずに代を継いで後孫万代に長く伝える」べきだと呼びかけている（同）。

以上述べてきたように、後継者の地位についた金正恩の最重要課題は「首領が開拓した偉業〔チュチェ革命偉業〕を輝かしく継承完遂し」、「首領の永世偉業を実現」することにあった。このために金正恩は全国に「太陽像を奉じ永世塔と主席様と將軍様の銅像を建立」したのである。つまり「太陽像」創造や「金日成・金正日の銅像を建立」することは、金正恩の権力基盤を確立することと不可分の関係にあった。金正恩を「首領永生偉業に対する忠実性」、「高潔な道徳義理心」の所有者、つまり朝鮮半島の伝統文化である儒教の徳目である“忠”や“義”を体現した人物（＝亀鑑）としてのイメージを「美術作品」の創造制作過程を活用して作りあげたのである。

ハ・ギョンホ論文が指摘しているように金正恩は、「わが美術を先軍革命領導の威力ある武器に、わが美術家たちを時代を先導し推動する革命の旗手に立たせ」るなど、金正恩時代における「美術」は金正恩体制構築＝「先軍革命領導」推進の核心そのものであった。

### (3) 金正恩時代の「国家美術展覧会」とその出品作品

2012年4月6日から30日まで、金正恩時代となって初めてとなる「父なる首領誕生100周年慶祝全国美術祝典 国家美術展覧会《永遠の太陽》」が平壤サーカス劇場で開かれた。（作者＝創作者名は省略）

報道によると「展覧会場には……白頭山偉人たちの不滅の革命生涯と業績を示す朝鮮画、油画、宣伝画、彫刻をはじめとして、父なる首領様の誕生100周年を迎え人民芸術家、功勳芸術家をはじめとする貫禄ある作家たちと新世代の美術家が新たに創作した500点余りの美術作品が展示された」という（「勝利と栄光の100年史に対する叙事詩的画幅 父なる首領誕生100周年慶祝全国美術祝典 国家美術展覧会《永遠の太陽》を見て」『労働新聞』2012年4月29日付）。この記事執筆した「本紙記者 リョ・ミョンヒ」は、この展覧会が「時代的な幅と深みが前例になく大きく深かったのみならず作品の主題と種類、形態が大変多様であった」（同）と記している。

『労働新聞』記事はまず「首領形象美術創作において前例のない成果がなすとげられた」と述べ、《悲運が覆った国》を「創作意図が目新しく独特な作品である」と評した。朝鮮画《普天堡の夜》、宣伝画《つねに人民を信じ革命を勝利へと導かれたわが首領様！》、《抗日の伝説的英雄金日成將軍万歳！》、彫刻《ハルモニ〔おばあさん〕らとの出会い》、朝鮮画《朝》、油画《追憶》などには「父なる首領様と抗日の女性英雄金正淑同志を象徴した作品には絶世の偉人たちの不滅の革命領導史が幅広く反映されていた」とある。また金正恩が何度か指導した油画《最初の軍旗》を「わが革命武力建設の道に積まれた白頭山偉人の不滅の業績を思想芸術的に立派に示している」と評している。

朝鮮画《自立的な大規模化学工業基地を整えてくださり》、油画《落下傘兵を育てられた日々に》、朝鮮画《ここにこどもたちの宮殿をもっと大きく勇壯に建てようと言われ》など「父なる首領様の不滅の業績と偉人的風貌を深く示す」（同）作品も多かったとしている。

この国家美術展覧会「《永遠の太陽》」展には金正日を象徴した作品も出品された。彫刻《白頭の行軍の道を受け継いで行かん》、油画《大湫島の新しい歴史を展開されて》、《最前線の哨兵たちを訪ねて》といった作品は「先軍勝利の一路へ導いて来られた敬愛する将軍様の不滅の革命業績を立派に叙事詩的画幅でよく示している」(同)とされている。

毛工藝《太陽宮殿の朝》、木工芸《白頭密宮故郷の家》、手芸《前線の道のコスモス》、油画《将軍様と兵士たち》、《2月の小泊水》、彫刻《血と涙の12月》なども展示され、これらは「二人の太陽を永遠に高く奉じ、この地に必ず社会主義強盛国家を打ち立てようとのわが軍隊と人民の信念と意志がよく反映されている」(同) 作品であった。

またこの記事によれば、「軍隊と人民の勝利と栄光の歴史」がこめられた作品も会場に展示された。そのうち「抗日武装闘争時期の歴史的事実」にもとづいて創作された作品としては、彫刻《血に塗られた道》、《銃台同志》、朝鮮画《イエ、イエ、イエー！ [ハイ、ハイ、ハーイ!]》、《普天堡戦闘の話》、油画《敗亡》などがあると伝えている。「祖国解放戦争」を主題にした作品としては油画《戦時輸送の日々に》、《火線で》、朝鮮画《後方の双子》、版画《勝利した人民》などをあげ、「わが軍隊と人民の必勝の信念と楽観主義精神、英雄的偉勲を……立派に象徴した」(同) としている。

記事では「社会主義強盛国家建設において奇跡と革新を創造してゆくわが軍隊と人民の闘争の姿」を多様な主題と形式で制作された作品も多いと述べ、朝鮮画《軍民の力を合わせて》、油画《コサンベク里果樹園の開拓者たち》、《大地の主人たち》、《熙川2号発電所建設場》、アクリル画《放牧地の朝》、朝鮮宝石画《植樹節の朝》などをあげている(同)。

油画《新雪の道》、《海の哨所》、手芸《増える中隊暮らす》なども「わが軍隊の闘争の姿を反映」している。

朝鮮宝石画《五佳山》、《西海閘門のかりの群》、手芸《リョンリムの地の香り》、版画《万寿台区建設場が見える所で》などの作品は「祖国江山の美しさ」と「偉人たちの指導のもとで日ごとに

変貌するわが国、わが祖国の現実を立派に象徴した」(同)と指摘した。

「不屈の統一愛国闘士〔注：非転向長期囚〕」の姿を象徴した彫刻《民族の念願》のような「祖国統一主題」の作品に創作家は「統一の朝に対するわが民族の意志」(同)をこめたという。

この国家美術展覧会には「金正恩同志を朝鮮人民軍最高司令官に高くいただいた消息を伝えた『労働新聞』を見て歓喜するわが人民の姿」を描いた朝鮮画《われらの将来》のように「限りなく明るい祖国の未来を表現した成果作」も登場したと記事にはあるが、画集『父なる首領様誕生 100周年慶祝全国美術祝典 《永遠の太陽》(外国文出版社 2013)にはそれに該当する作品は収められていない。

『労働新聞』の記事は、「今回の国家美術展覧会は、祖国と人民の前に積み上げられた白頭山天出偉人たちの不滅の業績を後代に長く輝かし、わが軍隊と人民の絶世の偉人の畢生の念願を実現するために社会主義強盛国家建設へと力強く鼓舞推動する意義ある契機となった」と評している。そして最後に「わが軍隊と人民は敬愛する金正恩同志に従い新しいチュチェ 100年代をわが国、わが祖国の強盛繁栄と勝利の年代で一層誇らしく輝かしてゆく」(同)と結んでいる。

この展覧会には、『労働新聞』記事や画集から判断して、①「首領象徴美術創作」作品＝「革命武力建設の……不滅の業績」、「偉人的風貌」を表現。②「軍隊と人民の勝利と栄光の歴史」を描いた作品＝「必勝の信念と楽観主義精神、英雄的偉勲」を象徴。③「社会主義強盛国家建設における人民の闘争の姿」。④「祖国江山の美しさ」と「変貌するわが国、わが祖国の現実」を描写した作品。⑤「祖国統一主題」＝統一への「民族の意志」表示、といった作品が主流をなしていた。こうした作品傾向はその後の美術展でも変わらない。「国家美術展覧会」をはじめとして、北朝鮮の美術展の展示物に、抽象画や裸体画はない。

文学分野では金正恩を主題にした作品集『黎明』(文学芸術出版社 2017)が出版されたが、金正恩を描いた肖像画や銅像は現時点で筆者はまだ目にしていない。

#### 4. 北朝鮮美術の政治的機能と伝統文化との共鳴

金正恩時代の美術では、「唯一的領導体系」のもとで金日成教示、金正日の『美術論』に加え、金正恩の“お言葉”が指針となっており、美術は「チュチェ革命偉業」の継承完遂、「首領永生事業」遂行のための手段である。北朝鮮のすべての美術家は朝鮮美術家同盟に所属し、その統制を受け、美術家は指導者が示した“教義”に従わなければならない、どのような主題を描くかは政治的態度＝「忠誠度」の表明でもある。

肖像画、銅像、モザイク壁画、徽章などに表現された指導者像は「偉大性」や「不滅の業績」を認識させる直観物であると同時に、首領に対する「忠誠心」を抱かせ「全社会の金日成－金正日主義化」をめざす宗教性を帯びた社会、組織における「宗教画」（イコン＝聖画）に類した崇拜の対象である。さらに金正淑を描いた作品は「首領決死擁護」精神を学ぶお手本である。

現代の北朝鮮美術において、労働者や農民、軍人を描くときには、「金日成－金正日主義」を体した模範的人物＝「金日成－金正日主義者の典型」が中心テーマである。こうした作品は北朝鮮における理想の「金日成－金正日主義者」（＝亀鑑、典型、模範）を描いており、現代の『童蒙先習』（朝鮮の子供用の道徳教科書）でもある。

北朝鮮における美術作品は、それ自体が北朝鮮の政治、指導者の思想を表現したもの〔政治の美術化〕であり、美術作品はすべて政治化〔美術の政治化〕されている。作品を鑑賞するときも、論評するときも、指導者の思想、価値観に依拠しなければならない。北朝鮮美術は政治そのものである。

北朝鮮の現代絵画は、朝鮮半島に伝わる「民画」のひとつである「文字絵」（「孝悌図」）や「忠臣・孝子・烈女の実話を叙し、以て世道人心に益せしめんとした」（小倉進平『三綱行実図』について）『書物展望』1940年〔昭和15年〕4月号）『三綱行実図』の挿絵との共通性も感じさせる。

「文字絵」は儒教の徳目である孝、悌、忠、信、礼、義、廉、恥の八文字にちなんだ故事を文字にして描いたもので、「君子がとるべき行動の指針」（兪弘濬著『文字図』ソウル・大元社1993）である。

『三綱行実図』に掲載された挿絵は「忠臣・孝子・烈女の実話」をわかりやすく「観感而興起」（絵を見て感じ、奮発し心を高める）をねらって描かれたものである（韓国学中央研究院編『朝鮮時代の本の文化史』ソウル・ヒューマニスト2008）。

北朝鮮の宣伝画（政治ポスター）において重要なのは、そこに書かれたスローガン（文字）である。絵はスローガンをわかりやすく説明する手段であり、「観感而興起」させるものであり、『三綱行実図』に掲載された挿絵と同様の役割をはたしている。朝鮮画や油画には現代の「忠臣・孝子・烈女」を描いた作品が少なくない。北朝鮮の現代美術は、伝統美術と共通した徳目を描くとともに、それらと共鳴した存在でもある。

#### 終わりに～今後の課題～

北朝鮮美術の研究は日本ではほとんどなされていない。北朝鮮の人々が「首領形象美術」作品をみて指導者にどれほどの“偉大性”を感じ“忠誠心”を抱くのか、それを示す客観的な資料は乏しく、その真意はよくわからない。

世界的にみた場合、政治体制ないしは政治指導者の思想と美術が結びついたナチズムやスターリン主義体制下〔全体主義〕の美術、毛沢東が発動した「文化大革命」時の美術とも比較対照することで、研究の深化をはかることができるかもしれない。

金正恩時代の北朝鮮では、美術の外貨獲得にはたす機能が一層強化され、このため万寿台創作社（万寿台海外開発会社グループ）は国連安保理事会などの制裁対象となっている。芸術品の輸出によって北朝鮮は過去10年間で1億6000万ドルを超える外貨収入があったと報道されている（『朝鮮日報』2018年8月20日付）。

北朝鮮の現代政治において最も重要な課題は、「金日成－金正日主義」にもとづいて「全社会の金日成－金正日主義化」を実現することにある。核・ミサイル開発は「首領が開拓した偉業」を継承発展させるための手段であるが、美術にも「全社会の金日成－金正日主義化」とあわせて同様の貢献が求められている。